

---

# ーク・ラブストーリー/エピソード6:ママがやってきた！(Mama Don't Preach)

栗須じょの

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「コーエーク・ラブストーリー／ヒンズード6・ママがやつてきた！」（Mama Don't Preach）

### 【ページ数】

25856C

### 【作者名】

栗須じょ

### 【あらすじ】

マイアミに暮らすティーンの母親が、マンハッタンにやってきた。自分がゲイであることを母親に隠そうと必死になるティーン。彼のパートナーであるポールは、そのことが甚だ面白くない。そうとは知らないティーンの母親は、息子に“女性の恋人”を紹介しようとすると始末。不機嫌になるポールに、弱るティーン。果たして彼は母親にゲイを告白できるのか…？

## (前書き)

いかがは 一話完結のシリーズ物 につき、ヒッソード第1話から  
お読み頂けると分かり易いと思います。  
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

涙はいつも唐突に訪れる。

恋人との別離。物悲しい夕暮れ。スシに入れ過ぎたワサビ……。涙の理由は様々で、今おれが流しているのは“感涙”という種類のもの。芸術というものは、いついかなる時代においても、人々の心に無垢なる感動を与えてくれる。

映画で泣いたのは、フエリニーの『道』を見て以来のこととで、今日の上映は『バンビ』。言わざと知れたディズニー不朽の名作だ。姉のアイリーンが「一晩だけ」と、彼女の一歳の娘、ステラをうちに預けたのは、今夜、自宅で弁護士を交え、離婚の協議をするため。先頃、おむつがとれたばかりの姪の“お泊りセット”の中に、『バンビ』のDVDがあつたこと。それが涙につながるとは、よもや思つてもみなかつた。

家族の絆と、愛と勇気の物語。バンビの恋人、ファーリーンはなんていい女なんだろう（鹿だけど）。バンビは命をかけてファーリーンを守る。これこそ真の人間のありようだ（鹿だけど）。

映画が終わり、となりに座つているステラに「バンビのようなボーライフレンドを見つけるんだよ」と言つと、彼女は「アーロン・カーターのがいい」と簡素なコメントを返してきた。まったく女つてヤツは。

物語はハッピーハンドになつたといふに、どうしておじさんが泣いているのか、ステラにはよく理解できないようだつた。ある意味これはおれにも理解できない。まさかこの年になつてバンビに泣かされるなんて。年をとつたせいで心が弱くなつたんだろうか。（ところで、スカンクの“フラワー”がゲイじゃないかつて疑つてかつたのはおれだけじゃないはず）

「さ、もう遅い。お風呂に入つて寝るとしようか」と、ソファからステラを抱き上げる。「わあ、ちょっと重たくなつたかな？」

「重たくなんてなつてません」

「そうだった。失礼、お嬢さん」

「バービーも一緒に風呂入つていい？」

「ああ、いいよ」

こないだまでやわらかくてフワフワしたぬいぐるみと一緒に洗ったのに、お供は巨乳のブロンンドにとつてかわった。子供の成長は本当に早い。

タイトルにジエルシールを貼りまくつてのお風呂タイム（裸のバービーも一緒。刺激的だ）。それが済んだらステラはおれのベッドをひとりじめ。おれはポールのベッドに入れてもう。お姫様は高待遇。ひとりで泊まりにきたのは初めてのことで、泣いたらすぐに迎えに行くとアイリーンは言つていたが、どうやらここまで大丈夫のようだ。

寝る前に彼女、おれにバービーのステッカーをくれた。それを指の先つちょにくつつけ、ポールに見せる。子供が寝たあとは大人の時間。ふたりがけのソファでくつろぎ、語る話題はバービーのこと。「このシール、カバンかどこかに貼つてみようか？　おれがやつたら、ちょっと洒落にならないだろ？」バービー・マニアだつて会社で噂されるかも

「誰もそんなふうに思わないよ。きみの場合、“生身のバービーの方が好き”って、みんな知つてるだろうし」

「いや、バービーは御免だね。なんたつて金がかかりそうだ」

「いつも最新ブランドを着てるしね」

「ケンが気の毒」

「ケンはゲイに目覚めて、G・E・ジョーに走るかも」

「そつちのほうがいい人生だ」

「そうかなあ？」

「そうさ、おれはそうだ」

「“コンバット”が好み？　バービーよりもG・E・ジョーのがセクシー？」

「からかうなよ。おれはバービーよりもきみが好きって言いたかつ……」

彼のキスが反論を塞ぐ。おれのシャツのボタンを外すポール。キスはそのまま。唇を離さず服を脱ぐのは難しいが、一秒たりともそれを離したくはない。バービーよりもファンタスティックで、G.I.ジヨーより頼れる相手。バービーのシールはテーブルの角に。セクシードールよりセクシーな生身の恋人。バービーは決して体験できないセクシーな夜。触れ合ふ素肌は吐息を呼び、お互いの熱を高め合づ。

「ポール……」

「ディーン……」

「ママ……」

ん？ なんだって？

居間の入り口に立っていたのは、ブロンドとピンクのパジャマ。「ああ……ステラ。目が覚めたのか」ソファから身を起こし、眠たげな姪に声をかける。「どうした？ バービーは一緒じゃないのか？」

ステラは目をこすりながら「……おしつこ」と、つぶやく。さすが一歳児。それをベッドで済まさなかつたのは偉かつた。もう赤ちゃんじゃないもんな。

トイレからベッドに戻るまでの間、キスについてはノーコメント。もう赤ちゃんではないが、かといって大人でもない。彼女が男同士のラブシーンにショックを受ける年齢でなかつたのは幸いなことだ。もしバービーに見られでもしたら、罵倒のひとつも貰つたことだろう。

「“キスしてた”って？」

翌週、姉のアイリーンから電話が入る。用向きは、“男同士のラブシーン”について。

「あんたたち、子供の前でなんてことすんのよ」

「キス？ キスだつて？ 今時キスぐらいでなんだよ。友達同士、キスしたつておかしかない。キスつたつて頬とかそういう……簡単なヤツだ。まさかそれぐらいのことで電話をかけてきたつての？」動搖すると口数が多くなるのがおれの癖だ。わかつちやいるが、上手く止められた試しがない。

「ステラは“おじたんたち、裸だつた”つて

「は、裸じやないよ！ 上は脱いでたけど、下はまだ……！」

アイリーンは無言。語るに落ちた。そもそも姉に隠し事をして上手くいった試しもない。

「アイリーン、聞いてくれ。おれは……」

「あのね、ディーン」と、おれの言葉をさえざる。「あたしはあんたがなんだつて構わないの。ただね、この話、ステラが電話でママに言つちゃつたのよ」

アイリーンの「メント」弟は無言。ニュージャージーの海岸はそろそりシーズンだらうか。そう、旅に出よう。

「……ママはなんて？」

「とりあつてなかつた。一歳の子供の言つことだからつて。女好きの息子の性癖を疑あうなんて、これっぽつけも思つてないのよ。息子を信じてるのね」

「姉さんはどうなの」

「あたしは娘を信じてるの。それにあんたにはそつちの素質があつたもの。驚きやしないわ」

「素質？！ 「冗談だろ！ おれがいつ？！」

「シルバーサーファーとマイティソーのポスターを部屋に貼つてたでしょ」

「そんなの！ アメリカ人の子供なら誰でも貼つてる！」

「怒鳴らないでよ。あんたがなんだつてあたしは構わないとてるじゃないの。いい、よく聞きなさい。来週、ママがそつちに行くわ

『セミテ国立公園にはまだ行ったことがない。素晴らしい滝とセイア・ツリー。旅に出よう。今すぐ!』。

「あんたクリスマスにもママに顔を見せなかつたでしょ? 息子が来ないのなら行くまでだつて。たまには親孝行することね。どこかいいレストランを予約するとかでもして……ちょっと、聞いてるの?」

ヨセミテ・バレーの夢想から醒めたときには、すべての流れが決定づけられていた。ママが来る。ここに。アイリーンは離婚で忙しい。よつて母親の接待はおれの役割。

シルバーサーファーとマイティソー、スーパーマンに超人ハルク。列車事故からテロの脅威まで、なんでもこなれるスーパーヒーロー。『地球の危機はぼくらにおまかせ』しかれども『おかあさん関連の事柄は除く』。どんなヒーローだつて“おかあさん”はいる。そしてそれからは遠巻きでいたいのが男というも。アメリカンヒーローはぼくのピンチを救つてはくれない。そんな世知を得た大人のディーンが『バンビ』に泣いたとしても何ら不思議はないというもののだろう。

ラガーディアは決して分かりにくいヒアポートではない。母はこれまでに何度もニコニコークに来ているし、マイアミに隠居するまでは、マンハッタンを地元として生活をしていた。それだから「空港まで迎えにきてちようだい!」と言わたところで、「なんでわざわざ?」と聞きかえしてもなんら不思議はないわけで、それは別に「ママを迎えるのがそんなにめんじくさいの?」ってわけではなくちろんない。

「空港からホテルまで行くだけだろ? 別におれが“お付き添い”する必要ないとしつけど」これは非常に常識的な意見だと思うが、ママには通用しなかつた。“常識問題”で議論したところで、こちらの負けは見えている。母親に抵抗して勝てた試しも一度としてな

いのだ。

友達から車を借り、ツアーコンダクターよりしへ香港まで出向く。『ミニアム・ケリー様』のプレートを表示していなくても、混雑したコンコースでお互いの姿を見つけることができるのね、母親と息子の絆あつてこそだ。

「ああ、長旅だつたわ！ 座りっぱなしで背中が痛い！」

余つなり旅の感想を述べる母。マイアミからニコーヨークまでは三時間弱。これが長旅だとしたら、ヨーロッパへのフライトは、円面旅行に匹敵するくらいの長さつてことになるんだろう。

ヴィーンのボストンバッグを肩から下げた小柄な赤毛の女性。これはおれのママ。で、となりに立つていてもやっぱり小柄な赤毛の女性。しかし見た目の年齢はママよりずっと若い。ぱっと見は二十歳代という感じだ。

「飛行機はアメリカン航空だつたんだけど、昔よりサービスの質が落ちたんじやないかしら。面白い映画もかかつてなかつたし、今度から違う航空会社にした方がよさそう。こぐらマイレージが貯められるからって言つても、やっぱ……」

「おかあさん、こちらは？」

マシンガントークを制し、初めて会つ、小柄で赤毛の女性について訊ねる。

「ああ、彼女はキャリー。うちのお隣のバック夫妻のお孫さんなの。

キャリー、これがうちのティーンよ」

「キャリー・バックです」小柄の赤毛は一寧にフルネームを名乗った。

「キャリーはマイアミに住んでるんだけど、一度もニコーヨークに来たことがないつていうから。今回は一緒に観光することとしたのなるほど、これがあるから“迎えに来て！”つてことだったのか。呼べば応える孝行息子がいるところは、お隣のバック夫妻に話して聞かせるには心温まるヒピソードだ。

ホテルに向かう道すがら、車内でママのトークは絶好調。キャリ

一はあのぼりさんらしく窓の外を凝視するでもなく、母の話に穏やかに相づちを打っている。これに付き合えるのだから大したものだ。ママがキャリーを連れてきた理由がよくわかった。

「キャリーのお仕事はね。保育園の子供に英語を教えているの「英語を?」ミラー越しに彼女を見る。

「仕事と言つてもボランティアですけど。その保育園は海外から移住してきた家庭のお子さんを専門に受け入れているんです。ディー・サンさんは絵画販売の企業にお勤めなんですって?」

「ええ、そうです。母から他にどんなことを? ぼくの子供時代の失敗はいくつ聞きました?」

「まあ、ディーンつたら。わたしはそんな意地悪おばさんじゃありませんことよ」口を尖らせる母に微笑むキャリー。

「マイアミから一コーエークまであつという間だったから、それほど多くのヒーピソードは聞いてないですね。絵画販売って面白いお仕事ですか? ケリーさんはそこでどんなことを?」

「そうですね、仕事としてはなかなか興味深いジャンルと言えるんじゃないかな。部署はアーティストとの契約を扱うのが主な業務です。ぼくのことは“ディーン”とお呼び頂いて結構ですよ」

「じゃ、わたしのことはキャリーと呼んでください」

まずはほつとした。今回の旅はただの観光旅行。息子の素行調査ではないらしい。安心した運転手は遠回り。市内のちょっととした見どころを巡つて、ガイドを受け持つ。「この建物はかつてウェザーマンのアジトで、入り口が切り取られたみたいになっているのは、爆弾の誤爆で建物の前面が吹き飛んだからなんだ」……とかなんとか。生まれたときからマンハッタンにいれば、それなりの観光地図だつて書けなくはない。

ホテルではポーターにチップを多めに渡し、“赤毛姉妹”的身柄を委任する。これでひと仕事終えた気になつていたおれは、まだまだ母親の実力を見くびっていた。翌日、ママがひとりでおれの部屋に現れるまで、おれは“いい息子”的自分に満足していたし、これ

から何か騒動が起きるなどとは、予想だにしていなかった。

手作りディナーで母を迎えたのは“いい息子”。同居人（実は恋人だが）のポールを爽やかに紹介し、三人でにこやかに夕食をとる。スペイン風オムレツは好評だったし、食後にはママの好きな濃い日のコーヒーを用意した。きめ細かいサービス。おれ自身、こんな息子が欲しいと思えるほど出来映えだ。これをもつてして“クリスマスにも顔を見せなかつた放蕩息子”的株が上がるといいのだが。ビスコッティの食べ方を説明した後、おれは何気なくキャリーのことを話題に出した。誓つて言つたが、そこには何の意味も、一片たりとも含まれてはいない。

「今日はキャリーと別行動なんだね？ 彼女、今夜何してるの？」

「なんでも高校の時の同級生がこちちこちこらしくてね。今日はその子の家に泊るつて……ねえ、キャリーのことなんだけど……」「うん？」

「どう思つた？」「

「どうつて……感じのいい子だよね。ママのおしゃべりに付き合つてもくれるし」

「ねえ、ほんとう、素敵な子よね？」

「ああ」

「わたしの娘にぴったりだと想つの」

「はっ？」「

「つまりね、あなたのガールフレンドにビッグかじりつて」

「なんだそれ！？」「

「あなた今ひとりなんでしょう？ 去年のクリスマスからずっと」  
動搖のあまり、口に運びかけたビスコッティがテーブルに落ちた。コーヒーに浸したそれは見事に崩れ、おれはキツチンペーパーを取りに台所に立つ。

「キャリーは26歳なの。あなたのふたつ下。年齢的にもううど

いいわよね？」

キッチンから戻り、ペーパーでテーブルを拭う間にも、セールスレディのトークは続く。

「昨日は車の中で楽しかったでしょ？　ねえ、どうかしら。いいと思わない？」

「別に」、パリ箱にペーパーを放り、無下に言つ。

「今さつき“感じのいい子だ”って言つたじゃない」「言つたけど……！」

「彼女は今夜何してるの？」つて、氣にもかけてる

「それは……そんなの誰だつて聞くだろ！　日常会話だ！」

“いい息子”終了。これだけはやるまいと思つていたのに、とうとう声を荒げてしまった。ポールは黙つておれたちのやりとりを聞いている。言いたい事がないわけではないだろうが、それはきっとママが帰つてからとなるだろつ。

「とにかく……よけいな世話をやかないでくれ。恋人くらいおれは自分で見つけられる」

「そういうのは恋人がいる人の台詞でしょ。まあ、固く考えることないのよ。自分で見つけようと人に紹介されようと、出会いは出会いよ。ママはきっかけを作つただけにすぎないの。あとはあなた方にまかせるわ」

「わかった。断る。いま断るよ。彼女とは付き合えない。そういうておいてくれ」

「なんなのその態度！　どういう狭いア見なの！　あなたキャリーのことをなにも知らないじゃないの。そんな初対面で断らなきゃいけないようなことを、彼女がしたつていうの？　いったい何が気に入らないのか言つて」、「らんなさい！」

ママもキレた。おれたち親子は、だいたいいつもこのパターン。コズビー・ショウより決まりきつた、お約束のオチだ。

「いや、彼女がどうとかじやないんだ……」

母親は腕組みをしている。おれのがはるかに背が高いのに、どう

してこの人はこんなにおつかないんだろう。

「何て言つか……話した感じから、彼女がいい人だつてのはわかるよ。ママが気に入るくらいだからね。ずいぶんと優しげだし……」

「頭もいいのよ」

「ああ、そうだろうね。会話しても疲れなかつたから、それはわかる気がするよ」

「じゃあ、なあに？ 見た目が気に入らないとでも？」

「まさか！ 彼女、平均より美人だ」

「言つてから“しまつた”と思った」 が後の祭りだ。ママを立てようと思って、つい褒め過ぎた。営業マンつてのは、褒め言葉に舌が滑り易い。なおかつおれつて男はやたら正直が過ぎるんだ。ポールの視線を背中に感じたが、正直者ゆえ振り向く勇氣がない。しかし振り向かずとも、その視線は突き刺さるように感じている。

「そんなに素敵なら付き合つたらいいのに」と、背後からポール。視線のみならず言葉も突き刺さつた。ブルータスおまえもか。味方であるはずのポールは、おれの心臓をざつくりとえぐつた。

「でしょう？ あなたもそう思つわよねえ？」 ポールにっこりと笑うママ。

「……やめてくれ

「だつて、いい年をして男同士同居してゐるなんて、知らない人が見たらゲイかなんかだと思うでしょ」

『ママ、おれはその“ゲイかなんか”なんだよ』 おれはここでそう言つべきだった。それができなかつたために、この後は苦難を強いられることとなる。

“やたら正直が過ぎるティーン”、しかし肝心なことは言わずじまい。でも言わなくたつてわかることが世の中にはあるだろ？ 男と暮らしている息子が夕食を手作りして待つてゐるあたりで『ウチの子はゲイだわ』って気がついてくれてもよさそつなもんだが。しかし“それとなく察する”というのは、我がファミリーには通用しない。思い込みが激しいのも多分遺伝だ。“遺伝子の神秘、ここ

に証明さるの巻”。いつからおれの人生はティスカバリー・チャンネルになつたのだろう。

おれと母親とポール。奇妙な三すべみのまま、コーヒーからワイ

ンに嗜好を変えて尚、ママのおしゃべりはまだまだ続く。

「……それでねえ、ディーンはそのときこいつ言ったの『ママ、ぼくの未来の奥さんはママよりもブラジャーのサイズが大きい人を選ぶよ』って……ねえ、このグラス、もしかしてバカラ?」ソファの上で足を組み、ワイングラスをライトにかざす。

「いや、パイレックス」

「そうなの? 結構いいじゃない?」でね、この子ったら“おっぱいコンプレックス”なのよ。一才まで哺乳瓶を手放さなかつたんですけど。それでつてわけじやないだろ? けど、ディーンの高校の時のガールフレンドはね……」

「おかあさん!」思わず出た声はシャウトに近い。努めてトーンを普通に戻し、母親に向かつて話しかける。

「……もう遅いだろ。ホテルに戻らなくていいわけ?」

「はいはい、早く追い出したいのね? いいわよ親不孝息子。出て行きますとも」

グラスを置き、ドア掛けに向かうママ。帰り支度をしながらも、その口は動きつ放す。

「ほんと男の子は大きくなるとこれだから。ママのハンサムくまちゃんは、憎らしい灰色熊になっちゃつて」

「やめてくれよ恥ずかしい……」

「なにが恥ずかしいの? 子供の頃のニーックネームくらい誰でもあるでしょ。ガールフレンドの前で言つたんじやなし。そんなに格好ばっかりつけてると、早くおじいさんになっちゃうのよ?」

「おかげさまで今日一日で思いつきり老けたよ

タクシーを呼んで、ママをホテルに送り返す。いっぽ『返品不可』のラベルを貼つてやりたいが、それはホテル側にも迷惑なことだろう。

リビングルームは一気に静かになった。背後でポールがぽつりとつぶやく。

「ハンサムくまちゃん」

「…………」

「巨乳じゃなくて申し訳ないな」

「ポール……」

「おっぱいコンプレックス」

「ポール……！」天井を見上げ、ため息をひとつ。「頼むよ……おれだつてまいってるんだから……」

「ぼくもさ」言って、ポールは食器を片付け始めた。力チャカチャ。グラスと皿のぶつかる音。それはいつもより冷たく感じられる。力チャカチャ。面白い。力チャカチャ。不愉快だ。食器が語る声が聞き取れるようになつたら黄信号。今日一日で老け込んだハンサムくまちゃん。食器は力チャカチャと語り続ける。力チャカチャ。最低。力チャカチャ。最悪。もちろんこれはおれの心の声に他ならない（ほんとうに聞こえてたら病氣だ！）。

「ユーロークに来ると、人はいきなり“ミュージカル好き”になるらしい。それまで一度もダンスに興味を示したことがない者でも、ここではなぜか舞台のチケットを買つてしまい、「アンドリュー・ロイド・ウェーバーは本当に偉大だね」などと、うつかり口にしてしまう。パン泥棒の罪で投獄されたのち、市長に成り上がるフランス男。家賃の支払いに事欠く貧乏アーティストの群像。そんなストーリーが連日連夜上演されているプロードウェイ通り。地元民にとってそれは、とくにスペシャルなことだというわけでは必ずしもない。ユーロークの誰も彼もが“歌つて踊れる猫”が好きだとはいひ。ユーロークの誰も彼もが“歌つて踊れる猫”が好きだとはいひ。限らないし、“オクラホマ”に感嘆符がついていないからと言つて、目くじらを立てる者ばかりではないからだ（注：“オクラホマ！”が正しい表記）。

「ミュージカルを観に行きましょう」と言われ、手放しで喜べないのは、おれが“非ミュージカル民”だからだけではなく、母と、母が押しつけようとしている女性と、三人一緒のプランである故だ。

「おれはいいよ、一人で行つてくれば……」指についたハーシーのキャラメルシロップを舐めながら、氣の抜けた返答。

「こういうのは男性がエスコートするものよ」と、あたりまえのようにつぶやく。

「そんな決まりないよ。オペラでもあるまいし」

「『オペラ座の怪人』、似たようなものでしょ」

「おれは行かない」キャラメルフレーバーのカフェラテに口をつけた。母が来てからというもの、糖分の摂取が増えたような気がする。「せつかくチケットとったのよ？ どれだけ大変だったか！ ママの苦労を無にするつての？」

「エドナ叔母さんを誘えよ」

「今からなんて無理です。もうぐだぐだ言わないの！ 時間厳守！ 支度なさい！ それともママが洋服を選んであげましょつか？」

「自分で選ぶ……」

「じゃ、着替えてらっしゃい」

結局、彼女の思惑通り。そうならないことなんて、これまで一度だつてないのだから、今回は相手が悪すぎる。ポールは“やれやれ”という表情であれを見ている。母親に強く出られないおれを腑抜けだと思つてゐるのかもしねえ。

ドアフォンが鳴り、モニターにはキャリーが写つてゐる。友達の家からここに直行し、それから三人でミュージカルの運び。ママの立てたプランは完璧だ。おれが“行かない”と答えることは、考慮にまるで入つていないうらしい。

戸口に立つキャリー。彼女はドレスに身を包んでゐる。

「遅くなつてごめんなさい。下にタクシーを待たせてあるわ。すぐに出られるかしら？」

微笑む彼女の姿を見、おれの呼吸は一瞬とまつた。ドレスアップ

した女性が目の前にいる。“平均より美人”のキャリー。身につけているのは、オスカーナイトに着ていくようなひらひらのドレス。

カラーはサーモンピンクを基調とし、ひざ丈のそれを強調するのは、編み上げた麻のサンダルだ。くるぶしからひざまでヒモが絡まっているのは、足を纖細に見せる効果がある。ビーチでならさぞ魅力的に映るだろう。髪にはラインストーンで象られた小鳥のピンが楽しげに踊り、マスカラには煌めくグリーンのラメが入っている。これはいつたい何系っていうんだ。英國のお笑い番組だってここまでではない。はっきり言って“トンチンカン”。カフェラテを口に含んだところでなくて本当によかつた。もうちょっと聞が悪きや、茶色の洗礼を彼女に施すところだ。ポールはくるりと後ろを向いた。その肩は小刻みに震えている。ああ、おれが出かけるからって泣かないでくれハ——ではなく、彼は必死に笑いを堪えているのだ。先日は彼女の服装にまで気が回らなかつた。そう言えば妙なキルティングのバッグを持つていたような気がするが……。

「まあ、なんだかこうして見るとふたりともお似合い……ねえ、そう思わないポール？」

母のコメントに、ポールはようやくこちらを向いた。

「いつてらつしゃい」と、笑顔を見せる彼に『おれは行きたくないんだ!』と、目で訴える。

「ゆつくり楽しんで来て。それじゃ……」笑顔のまま彼は扉を閉めた。

ドアの向こうで、ポールはどんな顔してる？ 爆笑？ 憤慨？ 舌でも出してる？ なんだか見捨てられたような気持ちがするが、もちろんそれはそうじゃない。悪いのはおれ。毅然とした態度をとれない、おれの身から出たサビだ。

ドアの向こうで、ポールはどんな顔してる？ 爆笑、憤慨、アカンベー。そのどれでもないとしたら？ もしかしたら彼は、寂しそうな顔をしているかもしないんだ……。

最悪には最悪が重なるもんだ。それは面白いように起る偶然の導き。劇場のロビーでばったりと出会ったのは、おれの友達のなかで一番ハンサムな男。それは友達のなかで一番すつとんきょううな男である。

「嬉しい驚きじやない。今日はどなたと？」

ローマンはおれを見つけるなり、小股で駆け寄り、親しげに両腕を広げてみせた。

「きみこそ……！ こんなところで何してる？！」 母とキャリーを両脇に従え、おれはアドレナリンの移動を全身に感じた。

「あらま、素敵なご挨拶だこと。何してるか教えましょうか？ 舞台を観にきたのよ。そちらは？」

「ああ……いや、おれもだ。そつ、舞台を観に……」 やばい。これもまた敵にまわしてはいけない人間のひとりだった。

“これは誰？” という表情のママ（“これは何？” といつ表情かもしれない）。それと対峙するローマン。なんて貴重な対戦カード。おれの人生で五本の指に入る最強生物同士が今夜、出くわした。

「紹介するよ、おれの母……。こちらは母の友人のキャリー。おかあさん、おれの友達のローマンだよ」

「こんちは」

にこやかに挨拶を交わす三人。キャリーの格好を見ても、ローマンは眉ひとつ動かさない。さすが、様々なヘンテコを見慣れているだけはある。

「今日の舞台、わたしのお友達が出演してるので。幕開きのダンサーの役なの。ぜひチエックしてみてね」 輝くような笑顔を浮かべ、アドレナリン増加の原因（の半分）は消えた。

「今の子はゲイね」 犬が見ても明らかに事実を口にする母。その口ぶりは、どこか勝ち誇ったようなニコアンスが感じられる。

「ママはマイアミでゲイを見慣れてるの。だからそういう子は一発でわかるわ」

だつたらおれのことも一発でわかつてくれよ……と叫びたくな  
るが、ここは堪える。

「」にわたしは居ます。しかし正体を明かすわけにはいか  
ない

今宵はオペラ座の怪人のテーマがよく理解できそつだ。

観劇の後は遅めの『ディナー』。普段は絶対に足を踏み入れたりしない、セントラルパーク内のレストランを予約した。これでもかという量のランタンと電飾は、まるで一年中クリスマスを祝っているかのよう。マッシュルームのスープとシーザーサラダ。メインディッシュはチキンのグリル。味はともかく、ここに座ることに意味がある。

この席で“男女のお付き合い”についての話題が出るのではないかと、おれは内心ひやひやしていたが、どうやらそれは杞憂に終わるそうだ。オペラ座の怪人についての一一般的コメント（シャンデリアのシーンがすごい、とか）を語らしながら、食事はそれなりに楽しそう、順調に進められた。

デザートを待つ間、「ちょっと失礼」と、席を立つママ。チョコレートケーキが運ばれて来た後も彼女は戻らない。まさかトイレで倒れているのではない始めたあたりで、ウェイターがあれに声をかけた。

「ケリーさま、お電話が入つております」

カウンターの隅に案内され、電話に出る。

「もしもし？」

「ディーン、中座してごめんなさいね。ママね、ちょっと用事を思  
い出したの。だから悪いんだけど、お食事は一人で楽しんでもらえ  
るかしら？ ジャあね」

やられた。なんという古典的手口。受話器を持って呆然としていると、バー・カウンターの向こうから、バーマンが「大丈夫

ですか？」と、聞いてきた。いつたいどんな悪い知らせをこの客は受けたんだろうという表情。“ママに置いてきぼりにされて、女の子とふたりっきりにされちゃったんだ”　　と、正直に言うのは、頭のネジがゆるんでいるように聞こえるだらうし、あまり同情してもらえないシチュエーションに違いない。

「ああ、大丈夫だ。たいしたこっちゃない……ちよつと……

“ちよつと？”と、目で問うバーマン。

「ちよつと……会社が倒産しただけ。いやなに、たいしたこっちゃない。席に戻るよ」

テーブルに戻り、キャリーに“母は急用が出来た”との顔を伝え、「ロウソクが短くなつてきたね」と、テーブルの上を見て言つ。その言葉には“ぼくたちもそろそろ出よつか”とユーモアنسが込められている。

「あら、そうね」と、気がついたようにキャリー。そこへバスボイがさつと近寄り、キャンドルを長いものと取り替えた。さすが觀光のメッカのレストラン。メシはまずいが従業員が多い。きっと口ウソクの長さを監視する専任がいるんだろう。おかげであと一時間は平氣つてことか。まったく気が利くつたらありやしない。

氣をとり直し、手にはフォーケ。チョコケーキの助けを借りれば、“楽しい時間”は、あつという間だ。

「あなたの名前……“バック”については珍しいですね。他に知つているのは、バロックの宫廷音楽家ぐらいかな。“ご両親はどうの?”出身ですか？」

「両親はマイアミよ。ルーツはアイルランドだけど……ねえ、ディーン、これってなんだか国勢調査みたいな質問だわ。もつとざつくばらんに話しません?」につこりするキャリー。それは確かに“ざづくばらん”な笑みに見えた。

いつもやつて話をしてみればよくわかる。キャリーはとても“いい娘さん”だ。ファッションセンスを気にさえしなければ、確かにママの言う通り、世の男どもにとつてはオススメ物件と言えるだらう。

日々従事しているのはボランティア活動。いつでも専業主婦に転身できる、家庭的な娘さん。ストレートの赤毛（ママは巻き毛だ）は可愛いし、おしゃべり好きの姑とも仲良くできる。しかしどんな“好物件”を見せられたとしても、今となつては何の意味もない。おれにはれつきとした彼氏がいる。たとえナタリー・ポートマンに告白されたところで、即座に断りを入れられるほど、おれはポールに夢中なんだ（今の台詞に若干、迷いが聞き取れた？ 気にするな！）。

「ヨーロークとマイアミ。お互いの暮らしで素晴らしいと思える点について話をしていると、田の前にテザートの皿が届けられる。

「頼んでないぞ」

果物とアイスクリームが盛られたゴージャスなチーズケーキ。こんな年のメニューで見た覚えもない。

「当店からのサービスです」と、ウェイター。

「サービス？」

「わたくしジモのバーテンダー、リチャードより、“たいしたこつちやない出来事”に贈る“たいしたこつちやない”テザート”だそうです」

カウンターの方を見ると、グラスを拭いているバーテンダーと田が合つた。ぱちんとウインクをするリチャード。やれやれ、“倒産”は言ひ過ぎだつたが。

軽くうなずき「もうひとつ」と、苦笑する。

「では」ゆづくつ、お楽しみください」「ウェイターも片皿をつぶつた。

「ヨーロークの暮らしで素晴らしいと思える点について 今

ならしくりでも語れそうだ。

「ふしお……なんだつてこんなサービスを受けられるのかじり」「田を丸くして、皿を見つめるキャリー。

「まあいいんじゃないかな、理由は気にしなくても。さあ、彼らの気が変わる前に頂いちまう」とにしよう「言いながら、アイスクリ

ームとケーキを小皿に取り分ける。

「ニユーヨークではよくこんなことがあるの？」

「まあね、男前であるつてのは得なもんぞ」と、素早く片手をつぶる。

「まあ……」

「これをもつて、“ぼくはゲイなんだ”ってニュアンスが伝わるといいんだが、まあそれは無理だろ？。今日のところは小さな親切に救われた思い。

『おまえの想像を絶するような災害が起こるだろ？』 そう叫んだのは、オペラ座の亡靈。しかしそれが起きたとしても、救いが訪れることがある。歌姫のたえなる調べ。バーテンダーからのスペシャルデザート。そうした事が起きるものまた人生。

オペラ座の亡靈は天使か、それとも狂人か。

物事というものは、見る角度によって、まったく別の顔に変化する。

今日のディーンは不幸か、はたまた幸福か。

とりあえずこのチーズケーキ、今日、口にしたもののがでいちばん素敵なティーストだ。それは善意によつてトッピングされたデザート。メニューに載せられないのは無理もない。金じや買えないものもこの世にはあるんだ。

ソフレ（夜の興行）を観て、そのあとデザートをふたつも平らげ、女性をホテルに送り届ければ、帰宅時間はそれなりのものになる。もうとっくに寝ているだろ？と思つたポールは、居間のソファでおれを待つていた。待つてはいたが、眠つている。待ちくたびれて眠るポール。ブロンドの髪におれはそつとキスをする。

「ディーン……？」

「こんなところで寝たら風邪をひくよ」優しくそう言い、もう一度キスを……と、試みたところで、おれの身体は寝起きの恋人によつ

て、思い切りはじきとばされた。

「ポール？」寝ぼけでもしているのかと、彼の名前を呼びかける。

「“ポール？”じゃない！」

「え？ なに？ ジャあ、きみは誰なんだ？」

「なにが“ポール？”だよ！ 今頃帰ってきて！」

「あ……そうか、遅くなつてごめん」

「きみのママから電話があつた」

「ママから？」

「『ディーンはキャリーとデートだから。帰<sup>モ</sup>が遅くなるけど心配いらないわ』って……」」「で、」

「ああ……」

「舞台は九時には終わつたはずだ。だからやむつくり楽しんだんだらうつね？」

「楽しんだつて？ おれが好きでキャリーと一緒にデートしてたとでも？ おれはママにハメられたんだ！ 三人で食事するつて手はずになつてたんだから！」

「それならふたりきりになつた時点で、すぐに帰つてきたつていはずだ！」

「そんな失礼なことできるか！」

「ぼくには失礼じゃないつての？！ いい？ きみは被害者になつたつもりかもしないけど、問題をややこしくしてこるのは、きみ自身なんだ！『ママ、ぼくはゲイだよ』ひとことやつ言えれば丸くおさまる！ 簡単なことやー！」

「だつておれは……」

「ゲイじゃない？」ポールは憤懣した面持ちで腕を組んだ。

「なあ、ポール、おれが愛しているのはきみだ。きみだけだ。おれは男が好きなんじゃない。きみのことが好きなんだ。もしまんいち、おれより先にきみが死んだら、おれはもう一度と男とは付き合わないと思う。それってゲイとは言わないだろ？」

「ぼくが死んだときのために備えてるつてわけ？」

「もうじやなくって……揚げ足をとるなよ」

「わかつてゐる。きみはぼくが“死んだ時”的めじやなくって、ぼくと“別れた”場合のことを考えてるんだろ? ぼくと別れて、そのあと女と付き合つて、そして結婚する。そうした将来を考えた場合、ゲイだとカムアウトするのは馬鹿らしい。ママにも未来の妻にせ、男と付き合つてました”なんてキャラリアはいちいち報告することはないからね」

「なんでそういう飛躍するんだ!」

「飛躍でないなら、どうして母親にぼくを紹介できないのか説明してくれー。 わあ、どうなんだ?」

「おれはママを……傷つけたくないんだよ」

「息子がゲイだってことで傷つく? ゲイは悪徳? ゲイは恥?」

「おれにとつてはもちろんそうじやないさ。でもママは昔の女性なんだ。世代も違うし、考え方も違う。おれたちが思う以上に、これは彼女にとつてショックキングなことなんだ」

「だからって隠し続けるの? お母さんが死ぬまで?」

「計算によると、おれたちが五十になる頃にはカムアウトでされる…

…ああ、そんな顔しないでくれ、冗談だ」

ポールはすっとソファから立つた。うつむき加減で「もう寝る」とだけ言い、部屋へと向かう。途中、ぴたりと歩を止め、こちらを見ずに「きみを罵倒するために待つてたんじゃないんだ」と、小声でつぶやく。

「わかってる」

「それだけ言いたかった」

「きみにキスをしても?」

「今は嫌だ」

「そうか」

「おやすみ」

「おやすみ」

おやすみのキスはなし。『碎け散ったシャンデリアよ、なお悪

い事も起こり得る』それは不吉なオペラ座の怪人の歌。ポールもおれも、そんな心境。

悲劇に見舞われたのはクリスティーヌ？ ラウル？ それともフアントム？

皆が被害者になつたつもり。なぜって悪人はひとりとして舞台にいないから。

問題をややこしくしておるのはおれ自身。おれは被害者になつたつもり。

ポールはおれとキスをしたくないと言つた。これ以上最悪なことなんて、今のおれには思いつかない。

愛する者に拒絶される夜。オペラ座の怪人に共感する日が来るとは、よもや思つてもみなかつた。

翌日、会社から帰宅したおれの耳に飛び込んできたのは、ポールの軽やかな笑い声だつた。昨日の今日だ。笑いの理由もわからないまま、おれはなんとなく嬉しいような気持ちになる。どんな理由にせよ、笑えるつてことはいいことに他ならない。

受話器を手にしたポール。おれに目を留め「あ、ディーンが……いま替わります」と、電話の相手に告げた。

「ディーン、きみのママ」

子機を渡され、それに出て。ママの用件は“エドナおばさんとのころに持つて行くお菓子はどこのブランドのものがいいか”つてことだつた。いくつかお勧めのスイーツの店の名前をあげ、手短かに電話を切る。“デートはどうだった？”まで、話を長引かせなかつたのは、我ながら上手くやつたものだと思つ。「紅茶を煎れるよ」と、ポール。一緒にお茶をしてもいいくつべらいには愛が回復したようだ。

「さつきはママと……なに話してたんだ？」

「別に大した話じゃない。ヒアロルン酸について質問されたんだ」

「ヒアロルン……」

「美容液だよ。安心していい、ゲイとはなんの関係もない単語だから」言いながら、紅茶の缶をぽんと開ける。

「「めん……」

「いいよ、もづ」

「怒ってるよな?」

「ん……そうね。でももづい。ぼくは考え方を変えたよ。きみがママに真実を打ち明けられないのは、きみの問題だ。ぼくはそれについて腹も立つけど、結局はきみがどうしたいかだからね。あきれたりボーアフレンドを選んだ自分を恨みこそすれ、ぼくにはきみを裁く権利はない」

ポールはちよつと眉をしかめたが、口元はわずかに微笑んでいる。それはまるで“あきれたボーアフレンドを選んだ自分にあきれる”ともいうような表情だ。

「ただあの女とはもうデートしないで。それを言つ権利はあるだろ? ぼくはきみのボーアフレンドなんだから」

「ああ、わかつてる。もちろんだよ」

「じゃ、この話はおしまい」と、紅茶のフタをぱちんと閉める。

「きみはずじいな……」

「す」「こ?」

「きみはどうやつて……どうしてうそなれた? ジリヤって今のきみになつたつていうんだ?」

「今のはくつて? ジリヤの意味?」紅茶の缶から手を離し、じちらを向く。

「きみは自分がゲイであることを正しく受け止めてる。かといつて、そうでないおれのことを裁くでもない……おれからすれば、それはとてもすじい」とじやないかつて思つただ。それつていつたじぢうやつたんだ?」

ポールは軽く首を傾け、ちよつと思案げな表情になつた。それからやあつて、「ぼくが高校生だった頃にね……」と、話し始める。

「ぼくはその頃すでに“自分はゲイだ”って自覚があった。好きな男の子も常にいたし、でも周囲のみんなにはそれを隠していたんだ。あるとき友達の家でパーティがあつて、皆で床に円座になつてゲームをやつていると、一組の男女がふざけてキスをし始めた。女の子はぼくのクラスメート。男の子の方は、ぼくが密かに片思いしていた彼だった。そのキスは軽い冗談なんだけど、ふざけていたにしても、それは唇と唇のキスで……それを見たぼくは、思わず“うらやましい”って言つてしまつた。それを聞きつけた周りのやつらは、“だつたらおまえもキスしろ！”って、言いはじめた。ぼくがそのままの子とキスしたがつてるつて彼らは受け取つたんだよね。意中の彼はニヤニヤしてこつちを見るし、女の子は恥ずかしそうにしてたけど、期待しているようにも見えた。はやし立てられて引っ込みがつかなくなつたぼくは、その場で彼女にキスしたんだ。それもけつこう長く。まったく馬鹿みたいなんだけど、さつきのキスシーンで嫉妬心に駆られたぼくは、彼に見せつけてやりたいような気持ちになつてたんだ。そんなことをしても相手はなんとも思わないってわかつてるのにね。ぼくにとつてその話はそれで終わりだつたはずなんだけど、でも彼女にとつてはそうじやなかつた。後日、その女の子はぼくのことをずっと好きだつたつて告白してきたんだ。当時ぼくはまだゲイをカミングアウトしてなかつたし、こつちが無理矢理キスした手前、彼女からの申し出を断りきれなかつた。しばらく付き合つてキスもしたけど、ベッドインするまでには至らなかつたよ。彼女、ぼくのことずいぶんオクテだと想つていただろうね」

「それでどうしたんだ？」

「別れたよ」

「なんて言つて？ カムアウトしたのか？」

「それはできなかつた。ただ“もう別れたい”って言つたんだ。彼女は理解できないつて言つてた。泣いてたし、とても傷つけたと思う。それでもぼくのことを愛してたから、最終的には黙つて身を引いてくれたんだ」

「いい子だつたんだな」

「うん、そう。だからぼくも辛かつた。“なんてひどいことしちゃつたんだ”って、自分にとても腹が立つた。それから後の人生は“自分に正直でいよう”って思つたんだ。自分を欺くことは、時に他人をも傷つけることになる。いい教訓になつたよ」

『自分を欺くことは、時に他人をも傷つけることになる』　嫌味で言つてゐるんぢやない。ポールは自分が人生で得た大切な教訓を、おれにシェアしてくれているのだ。

バンビであつても、オペラ座の怪人であつても、伝えようとしているメッセージは同じようなもの。『愛について誠実であれ!』あまたの物語はそれを繰り返し説いている。

「ポール……」

「ん?」

『顔を上げた彼の頸に指先を添え、唇を奪う。“きみにキスをしても?”とは伺わない。かなり強引な形でそれを求め、ようやく終えた後には、胸に抱えるようにして、恋人を抱きしめる。ポールはじつとおれの胸に顔を埋めている。

『会社が倒産しただけ』『男前であるつてのは得なもの』そのどちらも真実ではない。わかつちやいたが、おれつて奴は……なんていふか、ずいぶん“その場しのぎの男”みたいだ。今していることは、その場しのぎのキス?　まさか。これはそんなんぢやない。生きていくことに勇敢なポール。彼との口づけはおれに勇気を与えてくれる。マスクの怪人にキスをするオペラ座の歌姫。『神よ、わたしに勇気を与えて下さい。あなたはひとりではないのだと伝えるための勇気を……』切々と歌うクリスティーヌ、彼女はひとりではない。おれもひとりではない。自分を欺くことは、それにつながる誰かをも欺くこと。胸の中にいるのは、誰より大切なおれの恋人。彼とキスできなくなるなんて悪夢と同じ。一度とそんなことを言われたくないし、言わせたくもない。おれの背に腕を回すポール。彼もまたおれと同じ気持ちであることを、力強く掴む両手から感じる。拒

絶も悪夢も欲しくない。それは誰だつてそうに決まつてゐる。

「おれはゲイなんだ」

空港の見送りゲート間近。母が化粧室にいる間に、おれはキャリーにそう告白した。

「なんていうか……母が勝手に先走っちゃつて……」

「まあ……」

「母がきみに余計なことを言つたかもしれないけど……本当、とにかく申し訳ない」

キャリーはあきらかに困惑した様子だったが、ようやく「気にしないで」といづ單語を見つけ、それを口にした。

「お母さまはこのことを?」

「まだ知らないんだ」

「そう……」

「いめん」

「いいのよ

優しい微笑みを見せるキャリー。やっぱり彼女はいい娘さんだ。いま着ているテリア柄のカットソーが紫じやなかつたら、首に巻いたスカーフがレインボーカラーじゃなかつたらもつと素敵だつたのに。

「おまたせ」と、ママ。おれに荷物を持たせ、「い」数日の間、とつても楽しかったわ」と、嬉しそうに言つ。「久しぶりにいっぞい買い物もできたし。ねえ、この次は『ディーン』がマイアミにいらっしゃい。そのときはキャリー、あなたが案内してあげればいいわよね？」

「ママ、そのことなんだけど……」

重たく口を開くおれを遮り、キャリーがすぱっと切り込んでくる。

「今、『ディーン』と話をしていたんです。彼、わたしとは付き合えませんつて」

「ディーン！ あなたなんてこと……！」驚き、血相を変えた母。  
「もういいんです。彼を責めないであげてください」

「でもね、キャリー」

「本当にいいんです。わたしだって“ゲイの男の人”を紹介されても困るだけですしそう。あら、早く行かないと飛行機の時間が……それじゃディーン、お幸せに～」

バッグを肩に担いで去るキャリー。軽快な言葉とは裏腹に、その顔は少しも笑っていないかった。

残されたのは母と息子。キャリーが消えたゲートを見つめたまま、「ディーン」と、低いトーンでママが言つ。

「はい……」

「今のはどうこうことなの

「その……」

「まさかあなた、あのローマンって子と……」

「なんでそんなるんだ！！！」

「だつてゲイつて……」

「おれが付き合つてるのはポールだ！ ポール・コーブランドがあれは好きなんだよ！」

「まあ……」と、皿をぱちぱちさせた。「じゃ、ポールもゲイつて」と？

「そうなるね……」

「まー、うそみたい」

ママは何も気付いてはいなかった。ヒアロルン酸について詳しいポール、それと同居する料理好きのハンサムくまちゃん。それらの情報から“ゲイ”という単語を導き出すのは、きっと母親には難しいことなんだろう。

「まあ、じゃあわたしのしたことは余計なことだったわけね？ あなた“ここしばらく彼女がない”っていうから、気を利かせたつもりだったのに」

「黙つてごめん

「なんですぐに言わないの」

「言えると思ひへ？」

「そうでもすぐに言つて欲しかつたわね。わたしたち、もつとオーブンな親子かと思つてたわ」

「ママを悲しませたくなかつたんだ」

「悲しむ？ わたしが？」

「うん」

「いいこと」と、おれの顔にぐいと顔を寄せた。「ママはね、“息子が幸せかどうか”って、それだけが気掛かりなの。今はどうなの？ ポールと幸せにやつて居るの？」

「ああ……とても。とても幸せだよ。生まれて初めてつてへりこ幸せだ」

「だつたらそれで充分！」ぴしゃりと言つて、ぐいと胸を張る。

おれは安堵し、文字通り、肩から重荷（母のボストンバッグだ）を降ろす。

「よかつた……ええと、あとは何も聞きたくない？」

「聞きたいわよ！ 聞きたくないわけないでしょ！ あなたいつからゲイだつたの？ 今までつき合つてた女の子はカモフラーージュだつたの？ やっぱり父親がいないからゲイになつちやつたわけ？ だとしたらわたしにも責任の一回はあるつてことよね？」

「な……！ おれが幸せだつてわかつただけで充分なんじやなかつたのか！？」

「それとこれとは別よー。息子がゲイを告白してきたのよ？！ ちよつとはこっちの気持ちも汲みなさい！……で？ あなたいつからゲイだつたの？ 高校のときのヒースつて友達は？ あの子はゲイよね？ ママずっと気になつてたんだけど」

過去に遡つてまでの追求が始まつた。判事よりも恐ろしいおれの母親。この人はいつたいどうやって今のこの人になつたのか。それは現在、今すぐに知りたいことじやない。

ママに抵抗して勝てた試しは一度としてない。ママはいつも

おれより上手。<sup>うわて</sup> 彼女もまた、生きていくことに勇敢な人だ。

バー・ビーのシールをくれるステラ。弟がゲイでも構わないと言うアイリーン。息子が幸せであるかどうかを気掛かりとする母親。おれの周りには大切な人たちがたくさんいて、どうやってお互いを幸せにしてやろうかと、虎視眈々としている。

その最たる者があれの恋人。セントラルパーク内のレストランに、今度はポールを連れて行こう。そこは優しいバーマンのいるところ。おのぼりさんばかりのつまらない場所だという印象は、リチャードの親切によつて払拭された。新しい印象を人生に呼び込むことはいつだつてできる。姉と母にとつては新しいデイーン。ハンサムくまちゃんは今は昔。わずかばかり、他人を許して受け入れる余地があれば、その人の人生はより豊かになれる。

おれはポールを愛している。そのことを受け入れたおかげで幸せにもなれた。バンビにはファーリーンがいて、おれにはポールがいる。誰にだつて（鹿にだつて）大切と思える者が必要だ。それさえあれば、“想像を絶するような災害”も、“碎け散つたシャンデリアより悪い事”も、きっと何もかも乗り越えられる。

ボーアフレンドを伴い、レストランのバーに赴くのは、倒産を乗り越えた勇氣のある男。世界はときにおれに優しい。おれがあれ自身に優しくあれるとき、世界はおれに微笑みを見せてくれる。それは恋人の微笑みによく似て、いつまでも見つめていたような種類のものなんだ。

End .

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。  
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード」：恋愛小説家（<http://nicoode-syosetu.com/n6302c/>）に続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5856c/>

ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード6:ママがやってきた！(Mama Don'  
2011年8月15日03時25分発行